書式 7

助成番号	19－A17

成 果 報 告 書

記入日 2021 年　5 月　6 日

フリガナ：（　マエダ カナ　） 氏　　名：前田佳那	渡航先国名 台湾	留学先の所属機関：国立台湾大学芸術史研究所 帰国後の所属機関：九州大学人文科学府芸術学研究室 （日本学術振興会特別研究員 DC1）

研究テーマ：両宋院体画風について

研究期間　：　2020　年　2　月 ～　2022　年　1　月（約 2 年間）

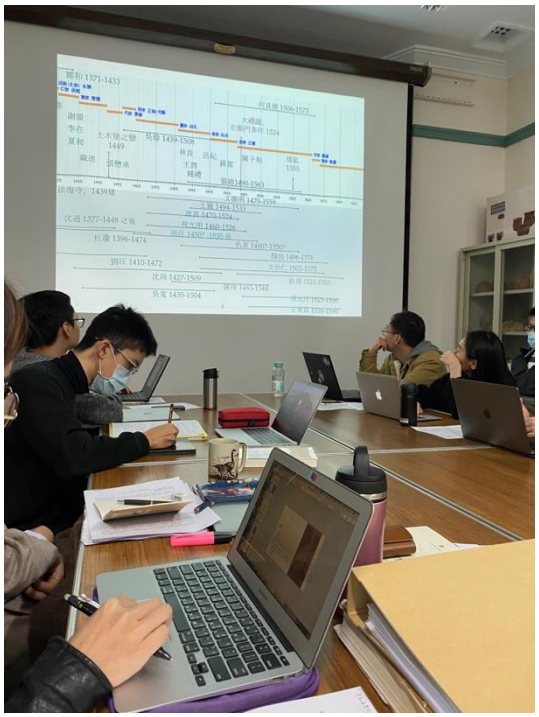
研究成果（概要）

宋代山水画は日本、台湾、米国に分蔵されている。研究員は学部の頃より日本各地で調査を行い、本留学の前年には米国でメトロポリタン美術館ほか四つの美術館で調査を行った。のこる台湾に所蔵されている作品調査と資料収集、及び中国絵画史研究の拠点である国立台湾大学芸術史研究所で、同分野の研究者たちと日夜交わした議論から得た多くの方法論的示唆は帰国後の博論提出にむけ大きな力添えとなった。

研究成果（詳細）

台湾に渡航中は、主に国立台湾大学の芸術史研究所において陳韻如副教授の指導のもと、本研究を発展させた。一年を通して、研究所で開講されていた陳韻如副教授の講義にすべて参加し中国絵画についてディスカッションをしたほか、週に一度個人指導が行われ、台湾大学での研究成果発表の機会も得た。また、オンライン上で九州大学の受入研究者である井手誠之輔教授とも月に一回定期的な面談を行い、台湾での研究状況や研究の進み具合を報告しながら研究を発展させた。次頁に具体的な業績を挙げる。

（写真左：研究所での日々の授業、右上：台湾大学図書館、右下：研究所の教授陣、先輩方）



台湾留学中の研究業績としては、北宋の宮廷絵画を考えるうえで重要な皇帝像についての論文翻訳①や、台湾所蔵の中国絵画の解説②を執筆させていただき、校正にあたって陳副教授や当館学芸員をはじめ多くの方に指導を賜るなかで、本研究にも多大な示唆を得た。

①陳韻如、前田佳那訳「宋帝后画像について－東アジア中世の帝王画像における宗教性と世俗性」『コレクションとアーカイヴ－東アジア美術研究の可能性』勉誠出版、2021 年
②前田佳那「祁豸佳山水図解説」『悦目―石頭書屋所藏中國晩期書畫展』石頭書屋出版社、2022 年

そのほか、グラスゴー大学でのシンポジウムにてオンラインで参加し、台湾での研究成果を発表したほか③、

③(口頭発表)Maeda K, Perceptions of Northern Song paintings among Japanese connoisseurs inthe early 20th century, Circulation of objects in global contexts, Glasgow, 2021,4,29

学外では台湾在住のアーティストたちと多く交流し、その紹介で、台湾に住む一般の方を対象としたオンラインイベントで北宋山水画の概説を中国語で行なった経験も貴重なものとなった。

④前田佳那「山水畫介紹」『《雲端同遊崑崙墟 2》―線上藝文直播演出』2021 年 8 月 20 日

そのほか、台湾の美術出版社として名高い雌雄美術が開催した一連のシンポジウム（「水墨,結束了嗎?再現筆墨精神」國際研討會、2021 年 12 月 4 ～ 5 日等）の際には、台湾の研究者の方々から都度お声かけいただき、運営に携わらせていただいたことで人脈がひろがり、今後も日本と台湾の研究者間の架け橋の一人として鋭意邁進していかなければならないことを自覚するにいたった。

本研究の基盤として設定した様式論的アプローチに関して、各国に収蔵されている作品の実見が必須となる。最も感動的だったことは、見ることが叶わないと思っていた国宝の北宋山水画が、国立故宮博物院の展覧会「故宮の至宝―范寛・郭熙・李唐」(2021 年 10 月)において出展され、実見調査の機会を得たことである。この展覧会をはじめ、以下の展覧会で本研究に関連する多くの作品を実見調査できた。この 2 年で足を運んだ展覧会は多すぎるため、主要なものの記載に留める。

「翰墨空間―故宮書畫賞析」（2020 年 6 月）嘉義市國立故宮博物院南部院區
「攬勝―近現代実景山水画」（2020 年 7 月）台北市國立故宮博物院
「權力的形狀―南薫殿帝后像特展」（2021 年 1 月）台北市國立故宮博物院
「画琳瑯－貨郎図特別展」（2021 年 4 月）台北市國立故宮博物院
「遺珠―大阪市立美術館所蔵書画選」（2021 年 7 月）台北市國立故宮博物院
「呼畢勒罕―清代活佛文物大展」（2021 年 8 月）嘉義市國立故宮博物院南部院區
「刻石取拓―故宮碑帖特展」（2021 年 9 月）台北市國立故宮博物院南部院區
「東亜茶文化展」（2021 年 9 月）台北市國立故宮博物院南部院區
「文人畫最後一筆―溥心畬書畫特展」（2021 年 10 月）台北市國立故宮博物院
「傅抱石一華人百年巨匠系列大展」（2020 年 1 月）晶美術館

こうしたフィールドワークを通して、日本のみならず台湾に所蔵されている北宋山水画を本研究に包括してゆく作業は大きく進展した。日本では叶わなかった作品群との比較のおかげで、研究対象である燕文貴山水の北宋山水画史における様式的特徴およびその史的意義をより明確にできた。また、こうした様式論のみにとどまらず、作品と観衆の関係性について近年盛んに議論がなされている国立台湾大学藝術史研究所において、数度の口頭発表を行うなかで（2021 年 7 月、2022 年 1 月)、燕文貴の絵画制作に関わった人物である宦官劉承規の重要性が浮かびあがった。ビューアーやクライントといった従来注目されてなかった、北宋前期における宮廷山水画に関わった人物たちを復元してゆく視点は明確になり、幾つかの新知見を提出するにいたった。

こうして発展させてきた研究成果を公にする学会発表および論文執筆は帰国後に集中している。2022 年 5 月の第 66 回国際東方学者会議における口頭発表、及び 8 月の第 106 回九州藝術学会における口頭発表をはじめ、どちらかまだ未定であるが年内には『デ・アルテ』（12 月投稿締切）か『美術史』（11 月投稿締切）に論文投稿し、研究成果を公にする。

留学中の生活・研究でのトピックス

留学中は、言語による劣等感のほか、討論の際には基盤となるものの考え方が異なり、鍛えてきたスキルが通用せず自身を失うこともありました。しかし、そこで相手のやり方に合わせてしまうのではなく、積み重ねてきたものを信じて自分なりに表現していくことで、徐々に自らの立ち位置を改めて把握し、そのうえで国際的な研究状況を俯瞰的に理解できるようになっていきました。

俯瞰といえば、もうひとつ俯瞰すべきものがあるかもしれません。それは、大学や学界という既存の枠組みです。私は、父親が画家で、幼い頃からアジアを中心とする芸術家との交流に恵まれ、彼らをとりまくアイデンティティーの問題や、ときに研究者からの心ない不適切な評価が制作に如何に影響するか痛感してきました。美術史学における机上の論理の追求にいそぎ、作品や人物がそのために利用される素材として扱われることは許されません。今でも、故郷である沖縄や台湾のアーティストたちと、夜通し芸術について熱く議論することがあります。明け方、”お前と話してるといつもまた絵が描きたくなってくる”と、専門をもって高みを目指しはじめたときにやっとできた本質を語り合える質の高い仲間の言葉は、研究者とは一体誰のために語っていくのかと、常に方法論を模索する姿勢を育ててくれます。アカデミックな場で、文献を通し数百年前に生きた先賢との対話を試みながらも、街角で今を生きる彼らと共に既存の枠組みによって見えなくされているものを如何に明らかにし、表現していくか考えるとき、こうしたなかでひとつの役割として育まれるのが、自分の研究であると思っています。

（写真左：台湾では、研究室にずっと閉じこもることはせず、自分の研究対象である山水画、その山水を多く巡りました。写真右：研究対象の山水画の描き方を教えていただいたり、台湾の今活躍するアーティストし、今後コラボしていくことを約束しました）

今後の社会貢献

美術史の研究者は多くが学芸員として、美術館博物館に就職し、ひらかれた展覧会を通して学会の研究成果を広く開示してゆく。学芸員として、そして最終的には大学で教授職につき、本留学を通し得られた国際的な視野を共有化しながら次世代の研究者とともに議論していきたい。また、学界のそとでは、自らも作品をつくる芸術家として活動している。帰国後すぐ、2022 年 4 月には留学中研究の傍ら準備してきた実家の漆工房をリニューアルしたアカデミアブランドをたちあげた。（ホームページ https://m-l-project.com）私の強みはアカデミア内外で活動し、両者を有機的に結びつけられる点だと考えている。もちろん研究者として学界での活動に重きをおきながらではあるが、こうしたアカデミアでの研究成果をどのように市井に還元してゆくべきなのか、双方の視点から現実的に考えていきたい。